審 査 の 結 果 の 要 旨

氏　名　林 憲吾

林憲吾による本論文は、インドネシア共和国のジャカルタ都市圏を対象として、居住環境分類という手法によって都市圏全体の居住環境の空間構造を明らかにし、その空間構造の規定要因を分析したものである。ジャカルタ都市圏は、現在、世界第二位の人口規模に及び、途上国メガシティの代表格である。この大量の人口を支えるのが居住環境であり、ジャカルタの空間構造の理解にきわめて重要である。しかし、データ不足が原因で都市圏全体の居住環境の分析はこれまでなされてこなかった。本論文はこの課題に対して、独自の分類手法を用いて新たにデータを作成し、地図・統計・行政資料やフィールド調査のデータを組み合わせることで、ジャカルタにおける居住環境の空間構造とその歴史的要因を提示し、そこから望ましい都市を実現する上でのポテンシャルとリスクを導く、意欲的な論文である。

本論文は全5章から成り、前後に序章と結章を付す。1章では居住環境分類の方法の提示とジャカルタへの適用を行い、都市圏全域の居住環境を4つの類型から描き出している。2章ではそのデータを分析し、ジャカルタにおけるカンポンの割合が過半に及ぶこと、計画的な住宅地の開発主体がジャカルタの東西で異なる傾向を示すことなど、これまでの明らかにされていなかったジャカルタの居住環境の特性を示している。3章から5章は、2章におけるカンポンの重要性の指摘を受けて、カンポンにテーマを絞り、その空間構造を規定する要因を章ごとに異なるスケールから分析している。2章までに居住環境の現状を解明するための方法と結果を示し、3章以降でその空間構造の歴史的な規定要因を解明し、結章でその現代的意義を考察するという構成は適切なものといえる。

都市の建造環境を分析する視点として都市スケール、近隣住区スケール、建物単体スケールの3つのスケールを本論文は導入し、居住環境を近隣住区スケールに位置づけている。そして都市全域の居住環境を近隣住区スケールの物理的な特性に基づいて分類するために居住環境の最小単位や指標の設定を行い、それをジャカルタ都市圏に適用し、類型の分布図を作成している。この新たなデータに、文献調査やフィールド調査などから得られたデータを組み合わせて分析するという方法が本論文の特色である。たとえば3章では、この分布図に

植民地期の土地利用や2000年の人口統計を組み合わせることで、植民地期から続く百年カンポンの存在を明らかにし、そこが他地域に比べ住民の民族構成において特殊性を有していることを定量的に示すことに成功している。このように居住環境分類という独自の手法の適用が、これまで明らかにされてこなかったジャカルタの特性やその歴史的要因の解明につながっており、独創的で有意義な研究手法だといえる。また、3章の百年カンポンや5章の建材の序列化は現代ジャカルタにおける植民地期からの連続性を明示するもので、現代都市を歴史研究の視座で分析するからこそ得られる貴重な成果だといえる。

結章では、本論文が明らかにしたことの現代的意義を考察している。百年カンポンの結果からは、植民地期からカンポンとして生きながらえてきたその歴史性によって、現在、ネガティブなイメージで捉えられ、撤去も進むカンポンに、ジャカルタの歴史的・文化的価値を高めるようなポテンシャルがあることを読み取っている。4章では郊外での都市と農村の混在（デサコタ）を検証した結果、デサコタが維持されている要因には従来の理論では説明できない点があることを明らかにしているが、この結果からは、郊外において環境悪化のリスクが高まっていることを導き出している。現代の居住環境を規定する歴史的要因の発見にとどめず、現地社会が気づいていない潜在的な価値や問題の深刻化を提示している点に、本論文の現代的意義を明確に認めることができる。

さらに本論文の採用した手法は、他の途上国メガシティの居住環境分析にも適用できる可能性がある。今後のさらなる研究によって、本論文のテーマが比較都市研究へ発展していくことも期待される。

よって本論文は博士（工学）の学位請求論文として合格と認められる。